

音楽科学習指導案の史的研究－明治期から現代までの変遷

教科・領域教育専攻
芸術系コース(音楽)
小 関 崇 司

1 問題の所在と研究の目的

学習指導案は教育実習や研究授業において特に重要視され、多くの場合、題材、指導目標、指導にあたって、評価の基準、指導計画、本時の指導といった内容から構成されている。しかし、普段の授業においては、必ずしも常に教師個々において、学習指導案が用意されているとは限らず、学習指導案を書かなくとも「教師の意図を反映した」「効果的な」授業を行うことは十分可能である。ではなぜ学習指導案は書かなければならないのか、そもそも学習指導案は何のためにあるのか。これまでの音楽科における学習指導案に関する研究は、形式の分析や新たな学習方法に対応する学習指導案の提示に留まっており、本格的な史的研究は行われていない。本研究ではこのような問題に取り組むためのステップとして、音楽科における学習指導案の歩みについて、戦前から現在までの学習指導案を概観し、どのように学習指導案が作成されてきたのか、どのような構想のもとに学習指導案が作成されてきたのかについて明らかにすることを目的とした。

2 研究の方法

戦前の学習指導案については主に文献研究によって当時の学習指導案の傾向と特徴を明らかにした。戦後の学習指導案については 宮城県

音楽教育研究協議会、東北音楽教育研究会及び主として東北地方で行われた全日本音楽教育研究会の大会要項より得られた学習指導案を用い、学習指導要領改訂を一つの区切りとする10年ごとの学習過程の記述に現れる特徴の分析を行った。

3 戦前の音楽科学習指導案

戦前の学習指導案は明治前期に外観が、その後明治後期に学習過程の記述が変更された事で原型が完成した。

明治前期に作成されていた学習指導案は「目的」「大意」「題目」「方法」の四項目で構成されていた。その当時広く行われていたペスタロッチ主義教育理論による学習指導法を授業において明確化するためにこれらの項目をもつ学習指導案が作成された。この四項目のうち「方法」は現在の「本時の指導」にあたる部分であるが、この「方法」が教師の問いと生徒の答えによる問答形式で記述されていることがこの時期の学習指導案の特徴であった。明治20年代後半、ヘルバルト主義教育理論が主流となり、その指導法が学習指導案の形式にも変化をもたらした。「目的」「大意」「題目」「方法」といった項目には大きな変化は現れていないが、「方法」が問答法による記述から形式段階を取り入れた書式になった。音楽科の学習指導案におい

ては「予備」「教授」「練習」の三段階で学習過程が構想される場合が多く、楽譜を用いないで授業を行う口授法、楽譜を用いて授業を行う視唱法のどちらにおいても学習過程の記述に大きな変化は見られなかった。

4 戦後の学習指導案

戦後は、学習者について記述が「学習活動」として教授行為と対応して書かれたこと、そして学習過程の記述に矩形が用いられたことが大きな特徴である。

昭和 20 年代の学習指導案は「単元学習」に基づく学習指導案が多かった。生活経験的なまとまりによる指導計画が立てられ、他の教科との連携がなされたものや、音楽科単独で構成された「単元学習」による指導計画がこの時期に数多く作成されていた。この時期はそのために教科としての系統性を維持するのが困難であり、昭和 30 年代以降は楽曲による題材の展開が主流となった。昭和 30 年代以降の学習指導案は現在まで基本的な変化は見られないが、それでも学習過程の記述を中心にいくつかの変更点が見られた。

昭和 30 年代の学習指導案ではそれまでの単元学習による学習指導案から楽曲による題材の展開となり、それに伴い学習期間もそれまでの長期間にわたるものから数時間単位の構成となった。この楽曲による題材の展開は昭和 50 年代まで続いた。昭和 40 年代になると学習の過程の記述に矩形を横断する形で目標が書き込まれた学習指導案が作成されるようになった。その初期は指導者側から見た目標が設定されたが、その後、学習者側から見た表現に変更され、現在でも用いられている。昭和 50 年代に作成された学

習指導案は、基本的には昭和 30 年代、昭和 40 年代に用いられてきた学習指導案が引き続き用いられた他、フローチャートを学習過程の記述に用いた学習指導案も作成された。しかし、昭和 50 年代初頭を過ぎると再び以前のような学習指導案が用いられた。

平成元年に改訂された学習指導要領下における学習指導案は、それまでのものといくつかの点で異なっていた。それは「指導」という言葉が大きく後退したことである。「指導過程」が「学習過程」へ、「指導上の留意点」が「教師の支援、援助」へとなるなど学習指導案上においても教師の役割が変化していると思われる。しかし一方で文部省刊行の指導資料では以前同様「指導過程」「指導上の留意点」といった表現が使われており、今後の学習指導案においてどのような変化が見られるのかは興味深いことである。

5 研究のまとめと今後の課題

学習指導案は、明治から今日までそれぞれの時代に主流であった学習指導法の影響を大きく受けていることが明らかとなった。更に戦後の学習指導案は学習指導要領の改訂に合わせて約 10 年ごとにその記述を変化させてきた。これは校種によっても違いが見られ、小学校が改訂とほぼ同時に変化をし、2～3 年遅れて中学校が変化をする形であった。高等学校は全く変化を見せず、おそらく学習指導案を作成する頻度と校種によるそれぞれの要因があることが予想され、このことについての研究も今後必要になると考える。

指導教官 小川 昌文